

化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度調査

7階西病棟

○羽田 秀子・藤原 キミ・中内 千昭
岡村 千春・中越 美和・山下 洋子
藤村 洋子

I. はじめに

当病棟は血液・呼吸器疾患を含む内科病棟である。そのうち悪性疾患の患者が約半数を占めており、その多くが化学療法を受けている。化学療法の副作用の一つとして消化器症状があり、患者は食べたくても食べられない状況で「ご飯はいらん。今は食べたくない。」等の言葉が聞かれたり、食事摂取量が減少し食事に手をつけずそのまま下膳する姿をたびたび見かけた。しかし、このような状況でも家族からの差し入れは補食しており、副作用が出現している時に患者の好みに合った病院食が出されていないかと思い、病院食に満足していないのではないかと考えた。

食事は生命の維持はもとより精神・文化的な意味を持ち、人間にとって欠くことのできないものである。まして、病人にとって治療的な意味を有し、より病院食をおいしく満足して食べることは、闘病生活の動機づけの上でも重要であると考え。そこで、今回私たちは化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度を知り、その満足度に影響を及ぼす要因を明らかにしたいと考え、この研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 研究期間：平成9年6月～10月
2. 調査期間：平成9年9月6日～10月12日
3. 対象：第3内科に入院中の化学療法を受けている患者17名
4. 調査方法：既存の研究をもとに、研究グループで作成したアンケート用紙を用いて、化学療法を受ける前と化学療法を受けた後一週間以内で面接調査を行った。なお、面接は1対1で個室を使用しプライバシーの保護に努めた。

5. 調査内容

化学療法を受けている患者の病院食の満足度に関しては、「おいしさ・好み・盛り付け・色彩・味付け・臭い・かたさ・食べやすい大きさ・品数・献立の種類・量・温度・食事時間・部屋の温度・部屋の明るさ・部屋の臭い・部屋の整頓・家

族の影響・食事への援助」の 29 項目、それに関する要因として、患者自身に関する「年齢、性別、食欲のあるとき、病院食の内容、治療の回数、補食の有無」の 7 項目、「家族のサポート・キーパーソン」に関する 6 項目、「化学療法の副作用」に関する 5 項目、「病院食の摂取量・補食の摂取量」に関する 2 項目、「化学療法の前後的での食事に対する考え」に関する 2 項目の、合計 49 項目である。化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度については 4 点法とし、満足度の高いほうが高得点になるようにした。

6. 分析方法

統計学的パッケージ HALBAU を用いて、基本統計量、カテゴリー度数の計算、相関関係、t 検定、一元配置分散分析による分析を行った。

III. 結果

1. 対象者の背景

平均年齢 61.18 歳 ± 11.27、その内訳は、40 歳代が 4 名 (23.5%)、50 歳代が 5 名 (29.4%)、60 歳代が 3 名 (17.6%)、70 歳代が 4 名 (23.5%)、80 歳代が 1 名 (5.9%) であった。性別は男性が 9 名 (52.9%)、女性が 8 名 (47.1%) であった。病名は悪性リンパ腫が 6 名 (64.7%)、急性骨髄性白血病が 3 名 (17.6%)、成人 T 細胞性白血病が 3 名 (17.6%)、慢性骨髄性白血病が 2 名 (11.8%)、肺癌が 2 名 (11.8%)、多発性骨髄腫が 1 名 (5.9%) であった。家族構成は、1 人暮らしが 0 名、2 人暮らしが 4 名 (23.5%) 3 人以上が 13 名 (76.5%) であった。家族の面会については、1 ヶ月の面会回数が少ない人で 0 回、多い人で 28 回、平均値が 15.65 ± 9.71 回であった。

患者のキーパーソンは配偶者が 12 名 (70.6%)、子供が 4 名 (23.5%)、兄弟が 0 名、父が 1 名 (5.9%) であった。化学療法後の病院食の種類は、常食が 11 名 (64.7%) 感染予防食 C が 3 名 (17.6%)、軟食が 2 名 (11.8%)、その他 1 名 (5.9%) であった。治療を受けた回数は 1 回目・2 回目の人が各 6 名 (35.3%)、4 回目の人が 5 名 (29.4%) であった。治療後の副作用としては、食欲不振のあった人および少しあった人が 14 名 (82.4%)、それほどなかった人およびなかった人が 3 名 (17.7%) であった。下痢・便秘のあった人および少しあった人が 10 名 (58.8%)、それほどなかった人およびなかった人が 7 名 (41.2%) であった。吐き気のあった人が 4 名 (23.5%)、それほどなかった人およびなかった人が 13 名 (76.4%) であった。口内炎があった人が 3 名 (17.6%) なかった人が 14 名 (82.4%) であった。胃痛のあった人および少しあった人が 3 名 (17.6%)、それほどなかった人およびなかった人が 14 名 (82.4%) であつ

た。治療後の病院食の摂取量は、主食 6 割以上が 12 名 (70.6%)、5 割が 3 名 (17.6%)、4 割以下が 2 名 (11.8%) であった。副食 6 割以上が 10 名 (58.8%)、5 割が 6 名 (35.3%)、4 割以下は 1 名 (5.9%) であった。補食は病院食の量に換算して、10 割が 1 名 (5.9%)、5 割が 1 名 (5.9%)、4 割以下が 12 名 (70.6%)、0 割が 3 名 (17.6%) であった。

2. 化学療法の副作用に対する認識

化学療法の副作用の症状を知っていた人は 13 名 (76.5%)、少し知っていた人は 2 名 (11.8%)、全く知らなかった人は 2 名 (11.8%) であった。その副作用の予防策を知っていた人は 2 名 (11.8%)、少し知っていた人は 3 名 (17.6%)、あまり知らなかった人は 2 名 (11.8%)、全く知らなかった人は 10 名 (58.8%) であった。

3. 食事に対する考え

「空腹感を癒すこと」と答えた人は、化学療法前後とも 1 名 (5.9%) であった。「健康を保ち増進あるいは回復させること」と答えた人は、化学療法前は 10 名 (58.8%) 化学療法後では 15 名 (88.2%) であった。「食を楽しみ、好みを満たすこと」と答えた人は、化学療法前は 1 名 (5.9%)、化学療法後はいなかった。「習慣付けとなっていること」と答えた人は、化学療法前は 2 名 (11.8%)、化学療法後では 1 名 (5.9%) であった。「コミュニケーションの場であること」と答えた人は、化学療法前では 2 名 (11.8%)、化学療法後ではいなかった。

化学療法前後の食事に対する考え方の変化では、化学療法前後に「空腹感を癒すこと」と答えている人は 1 名 (5.9%) で、化学療法後にも同様の答えであった。化学療法前に「健康を保ち増進あるいは回復させること」と答えた人は 10 名 (58.8%) で、化学療法後はそれらの人のうち 9 名 (52.9%) は同様に答えており、残り 1 名 (5.9%) が「一家団欒の場でありコミュニケーションの場」と答えている。化学療法前に「食を楽しみ好みを満たすこと」と答えている人は 1 名 (5.9%) で、「習慣付けとなっていること」「一家団欒の場でありコミュニケーションの場」と答えている人は各 2 名 (11.8%) で、これらの人たちが化学療法後には「健康を保ち増進あるいは回復させること」と答えている。

4. 化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度

病院食がおいしい・まあまあおいしいは 9 名 (52.9%)、あまりおいしくない・まずいは 8 名 (47.1%) で、過半数以上の人がおいしいと答えた。好みに合った食事が出ている・まあまあ出ているは 12 名 (70.6%)、出していないは 5 名 (29.4%) で、過半数以上の人がおみにあった食事が出ていると答えている。盛り付けはおいしそう・まあまあおいしそうは 14 名 (82.3%)、あまりおいしそうでない・まずそうは 3 名 (17.7%) で、

ほとんどの人がおいしそうと答えた。色彩は適当である・まあまあ適当であるは 15 名 (88.2%)、適当でないは 2 名 (11.8%) で、ほとんどの人が満足している。味付けの塩加減、甘さ、酸味については適当である・まあまあ適当であるは 11 名～13 名 (64.7%～76.4%) で、あまり適当でない・適当でないは 4～6 名 (23.6～35.3%) で、適当であると考えている人が半数を占めている。

病院食の主食と副食の臭いが気にならない・あまり気にならないは 10～12 名 (58.8～70.6%) で、まあまあ気になる・気になるは 5～7 名 (29.4～41.2%) で、半数の人は気にならないと答えたが、気になる人も 3 分の 1 以上を占めていた。病院食の主食と副食の硬さが適当である・まあまあ適当であるは 16～17 名 (94.1～100%) で、適当でないと答えた人が 1 名 (5.9%) であった。

副食は食べやすい大きさになっている・まあまあなっているは 15 名 (88.2%) で、あまりなっていない・なっていないは 2 名 (11.8%) であった。副食の品数は適当である・まあまあ適当であるは 13 名 (76.5%)、あまり適当でない・適当でないは 4 名 (23.5%) であった。

献立の種類は豊富である・まあ豊富であるは 11 名 (64.7%)、あまり豊富でない・豊富でないは 6 名 (35.5%) であった。

病院食の主食と副食の量は適量である・まあまあ適量であるは 12～13 名 (70.6～76.5%) で、あまり適量でない・適量でないは 4～5 名 (23.5～29.4%) であった。病院食の主食と副食の温度は適温である・まあまあ適温であるは 12～14 名 (70.6～82.4%) で、あまり適温でない・適温でないは 3～5 名 (17.6～29.4%) であった。

食事時間は適当である・まあまあ適当であるは 17 名 (100%) であった。

食事時の環境として部屋の温度、臭い、明るさ、食事がしやすいように身の回りが整っているかについては、適当である・まあまあ適当であるは 13～17 名 (76.5～100%) で、あまり適当でない・適当でないは 0～4 名 (0～23.5%) で、大半の人が適当であると答えた。

食事の時間に家族の面会があればいつもより食が進む・まあまあ進むは 6 名 (35.3%) で、あまり変わらない・変わらないは 11 名 (64.7%) で、3 割の人が食が進むと答えている。家族の差し入れがあれば病院食よりそちら (差し入れ) を食べる・まあまあ食べるは 15 名 (88.2%) で、あまり食べない・食べないは 2 名 (11.8%) であった。

食事内容を変えたいとき自分の希望がすぐにはかなえられた・時々かなえられた人が 14 名 (82.3%) で、あまりかなえられなかった・かなえられなかった人が 3 名 (17.7%) であった。

自分が食べたいと思うときに食事をとることができた・まあまあできたは 13 名 (76.5%) で、あまりできなかった・できなかったは 4 名 (23.5%) で、過半数の人が自分が食べたいときに食べることができていた。

食欲がないときに食欲が出るような工夫がされていた・時々されていたは 9 名 (53.0%) で、あまりされなかった・されなかった人は 8 名 (47.0%) であった。

病院食について満足している・まあまあ満足しているは 12 名 (70.6%) で、あまり満足していない・満足していないは 5 名 (29.4%) で、大半の人が満足していると答えた。

5. 化学療法前後の病院食に対する満足度の比較

化学療法前の総合平均得点は 94.35 点で、化学療法後の総合平均得点は 90.59 点で、有意差は見られなかった。

6. 化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度と各要因の関連性

年齢・病院食の摂取量・補食の摂取量と、病院食の満足度について相関関係は認められなかった。家族構成・化学療法の副作用の認識・病院食に対する考え・キーパーソンと病院食の満足度については、一元配置分散分析で分析した結果、有意差は認められなかった。性別と病院食の満足度については、t 検定で分析した結果、有意差は認められなかった。化学療法による副作用の強さを点数化したものと病院食の満足度について相関関係で分析した結果、有意差は認められなかった。

IV. 考察

今回私たちは、化学療法を受けている患者の病院食に対する満足度を知り、その満足度に影響を及ぼす要因を明らかにしたいと考え、この研究に取り組んだ。

化学療法後は副作用により味覚の減退あるいは変化を訴える人が多く、一般的にも化学療法後に金属の味がすることや、苦味の味覚低下が 70~80%認められると言われている。しかし今回のアンケート結果では、病院食はおいしいと答えた人が過半数以上あった。おいしさの基本はまず食物の味によって決まると言われているが、色彩・味付け・臭い・硬さ・食べやすい大きさの一つ一つについては、大半の人が適当であったとの結果が得られ、このことから半数以上のおいしいという結果となったと思われる。好みに合った食事が出ていると答えた人が過半数を占めていた。しかし、約 3 割の人が好みにあった食事が出ていないという結果もあり、化学療法後のアンケート聴取時「麺類・デザート類」を出してほしいとの声も聞かれ、好みを配慮した食事内容を考えていく必要があると思われる。

年齢と病院食の満足度について関係があるのではないかと考えた。その理由として、老年期は食糧不足の時代を経験しており、ものを大切にする思いがあると思われるが、現在は飽食の時代と言われており年齢層の違いにより相関関係を認められると考えたが、今回は認められなかった。

病院食の摂取量が増加すれば、病院食を満足して摂取していると考えて分析を行ったが、関連性は認められなかった。満足度に反映するものとしては、量的なものがすべてではなくもっと質的なところにあると考えられる。また、食べたくはないけれど無理に食べていることも考えられ、摂取量により満足度が変化するとは言えないのではないかと考える。病院食に満足していない人ほど補食している量が多いと思い、相関関係の分析を行ったが有意な結果は認められなかった。このことは補食の一日トータル量の補食摂取量についてなど、細かい限定をしていなかったためあいまいであり、正確な補食の量が出ていなかったことも影響しているのではないかと考える。

食事環境は大半の人が適当であったと答えており、食事を取り巻く環境にはほぼ満足していたと思われる。

食事の時間に家族の面会があれば食が進むと答えた人が3割ほどあり、また家族の差し入れがあれば病院食より差し入れを食べる人が大半いることにより、家族の関わりも影響しているのではないかと考える。

食事の内容を変えたいときに、自分の希望がかなえられた人とかなえられなかった人とほぼ同数であるが、化学療法前と後において食事内容が十分に配慮されていない状況もあると思われ、食事について今後把握する必要があると考える。

化学療法の副作用に対する認識では、化学療法の副作用について説明を受けて知っていた人は13名いたが、副作用の予防策を知らなかった人は10名もいた。このことから症状について説明を受けていても、予防策についての説明は不十分であったと思われる。今後は化学療法を受ける患者に、予防策についても十分な説明を行っていく必要があると思われた。

化学療法を受けている患者の食事に対する考えでは、化学療法前に「健康を保ち増進あるいは回復させること」と答えた10名のうち、9名が化学療法後も同様に答えており変化はほとんどなかった。しかし化学療法前で、「食を楽しむこと」「習慣付けとなっていること」「一家団欒の場およびコミュニケーションの場であること」と答えた5名は、化学療法後では「健康を保ち増進あるいは回復させること」に変化している。このことから病気になったことにより、食事に対する考え方がより健康面を重要視するようになったと考えられる。

化学療法の副作用の強さにより、病院食に対して満足していないのではないかと考え各要因との分析を行ったが、有意な結果は得られなかった。今回の研究では1回の治療で終わる悪性リンパ腫の患者が多く、疾患の偏りがあったことに加えて、嘔吐抑制剤の効果が上がり嘔気・嘔吐の症状を訴える人が少なかったことも原因ではないかと考える。

V. おわりに

今回の研究において、化学療法を受けている患者の病院食に対してほとんどの人が満足しているという結果が得られた。しかし、各要因の関連性については関連がないという結果になった。これらの結果は症例数が少なかったことも影響していると思われる。今後は症例を増やしアンケート内容を見直し検討を重ねていきたい。

参考文献

- 1) 中村 丁次：栄養と食事療法の知識<JNN スペシャル>，47，医学書院，1995.
- 2) 国立ガンセンター中央病院看護部：がん専門看護，日本看護協会出版会，1996.
- 3) 正岡 徹、仁科 満栄：ナースのための白血病ノート，南江堂，1993.
- 4) 早野 直也他：微生物研究所編，実践的看護と食事療法，丸善，1988.